なりたの昔話

第2回

このコーナーでは、昔から語り伝えられてきた成田の昔話や伝説などを掲載していきます。

【参考文献】コミュニティ成田No.28（平成元年発行：成田市）

千把ケ池

むかし、松崎村にお鶴という、からだが大きくて力も強い、それは働きものの娘がいました。野良仕事をさせれば、男の人の三、四人分の仕事をするし、それがとても上手なのです。名主は、お鶴をすっかり気に入り、自分の家に奉公させていました。ある年の田植え時に、名主がお鶴にこういいました。

「なあ、お鶴、お前もそろそろ年ごろだ。婿をもらうには田んぼがいるだろうから、一日で千把の苗を植えたらその田んぼをお前にあげよう。一日は、暮六ツ*の鐘が鳴るまでだよ」

「名主さま、ほんとかね。それじゃ、明日さっそくやるからね」

お鶴は、喜んでいいました。

いくら働きもののお鶴でも、男三人でさえできない千把の田植えです。名主は、

「お鶴には、少しでも多く植えてもらい、そのうえ、田んぼはやらなくてもすむんだから、これは得になる」

と思っていました。

次の朝、約束どおりお鶴は、日の出といっしょに植えはじめました。さあ、田んぼをもらえるというので一生けんめいです。水も飲まず、昼食も食べず田んぼの中をはいずりまわるようにして、植えていきました。どうやら、日が沈まないうちに終わりそうです。そこへ、様子を見に名主がやってきて、びっくりぎょうてん。もう間もなく終わりそうな、お鶴の仕事を見て、

「これは大変だ。このままでは、約束どおりこの田んぼをやらなきゃならないぞ」

まだ夕暮れにもならないというのに、暮六ツの鐘をついたのです。ちょうど、千把めの苗をつかんでいたお鶴は、暮六ツの鐘が〝ゴーン、ゴーン〟と鳴りだしたので、びっくりしました。

仕事の手を止めたお鶴は、またの下から太陽をじーっとながめ、

「おてんとうさんは、まだ沈まないよ」

とはいったものの、力が尽きたのか、田んぼの中で倒れ、そのまま息が絶えてしまいました。ところが、不思議なことにその夜、お鶴が田植えをした田んぼは、池に変わってしまいました。村人たちは、それからというもの、この池を千把ケ池と呼ぶようになりました。

*暮六ツ＝午後6時のこと。なお、千把ケ池があった場所は、ニュータウンの成田北高校の北側に隣接する辺りです。

編集後記

7月27日は土用の丑の日。この日に合わせて開催されるのが「成田うなぎ祭り」です。「うなぎ」といえば最近、ニュースで話題になるのは価格の高騰ばかり。わが家でも年に数回は、家族そろってうなぎ屋へ行くところ、ニュースで取り上げられるたびに、「やめておこうか…」と足は遠のくばかりに。とはいえ土用入りはもうすぐです。奮発して、おいしいうなぎを食べて精をつけ、この夏を乗り切ることにしましょうか。

平成24年7月15日号　No.1223

成田市のホームページ

http://www.city.narita.chiba.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD（ユニバーサルデザイン）フォントを使用しています。

平成24年7月15日号／月2回　1日・15日発行／編集発行：成田市役所企画政策部広報課　〒286-8585 千葉県成田市花崎町760番地　電話0476-22-1111（大代表）